

## 目的★ 目標●

- ★ 全ての子どもたちが、障がいの有無にかかわらず、多様な個性を互いに認め合い、支え合いながら、ともに学んでいくことができる環境を醸成し、誰もが生き生きと活躍できる社会を実現する。
- それぞれの学びの場における教育の質をこれまで以上に高める。
- 障がいのある子どもの学びの場の連続性を高める。

## 学校運営 連携校

- 【A地域】 北海道七飯養護学校(対象:知的障がい)  
七飯町立七飯中学校
- 【B地域】 北海道中札内高等養護学校(対象:知的障がい)  
北海道更別農業高等学校

隣接型

## カリキュラム・ マネージャー

- 【A地域】 元中学校長
- 【B地域】 元特別支援学校長

## 事業1年次の 取組概要、 成果、課題

- 【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方】
- ・総合的な学習(探究)の時間による交流及び共同学習を実施したことにより、双方の生徒が相手校の生徒や学習を知ることにつながり、個別のニーズに応じた取組や、共同学習の側面に軸足を置いた取組に向けた基盤づくりとなった。(A地域3回、B地域2回実施)
- ・交流及び共同学習の実施回数確保、共同学習に軸足を置いた計画の立案と教科の目標に照らした評価の累積が課題である。
- 【専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】
- ・授業参観及び参観後の協議、合同研修等により、両校の先生方が互いのことを知り、心理的距離を縮めたことで、実施内容に関する検討が活発に行われるなど、交流及び共同学習の充実につながることができた。
- ・特別支援学校と中学校、高等学校の教職員によるチーム・ティーチングの定着など、フレキシブルな体制の構築が課題である。

## 取組概要(事業2年次)

- 本事業の2年目は、「生徒・教職員の主体性」と「フレキシブル」をキーワードに、昨年度の取組を基盤に実践した。
- 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業としては、保健体育、音楽、美術等の実技教科において、直接交流と動画等の間接交流を組合せた共同学習を展開した。A地域の保健体育では、生徒の実態に応じゴール距離を5m~45mの間で設定する等の学習環境の調整を行うことで、障がいの有無に関わらず共に学ぶ「等身大」の授業を実践した。また、B地域では、高等学校の学校設定科目「カルチベーション」へのオンライン参加を定着させ、両校の生徒が互いに多様な意見に触れる機会を設けた。
- 専門性を高めた授業実施のための体制構築としては、両校合同の委員会を組織したことで、担当や目的が明確となり、議論が焦点化・具体化されたことに加え、単なる情報共有に留まらず、実践に直結する意見交換が活発に行われ、交流及び共同学習の取組が加速した。A地域では、特別支援教育コーディネーターが週1回中学校に出向く体制を確立し、日常的な助言や校内研修の講師などを行うことにより、中学校教員の専門性の向上に寄与している。また、B地域では、事例検討を中心とした「共に学ぶ会」を定期的を開催し、両校教職員のスキルアップを図った。併せて、学校経営計画に「共に学ぶ」姿勢を明確に位置付け、組織的な推進体制を強化した。
- 今年度は、生徒の意識変容や教職員の一体感が醸成されるなど、取組の「日常化」が進んだ。今後は、小中高の連携の拡充や、事業終了後の自走に向けたシステム構築に重点を置いて取組を推進する。

### ①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討



#### 【A地域】

- ・[総合的な学習の時間]リズム体操／ゲーム:同世代とのふれあいを目的に実施。互いの良さを理解し、社会で共に生きる一員として認め合い支え合う気持ちの育成
- ・[総合的な学習の時間]クリスマス屋台広場:過去の学習を参考に中学生が6つの屋台を設営・準備。両校生徒が交代で運営するなど、主体的に取り組む態度の育成
- ・[保健体育]インクルーシブサッカー:個々の技能に応じたゴール距離の設定(5m~45m)。障がいの有無に関わらずスポーツに親しむ資質・能力の育成
- ・[保健体育]ボッチャ／モルック:感覚過敏の生徒にモルック棒を工夫。体育理論(共生社会におけるスポーツの価値)と関連付けた資質・能力の育成
- ・[音楽]手話歌「翼をください」:間接交流(動画)と直接授業の組合せ。歌詞の解釈を深め、歌唱・手話を選択し表現する能力の育成
- ・[美術]けっちゃんづくり:間接交流(デザイン画・鑑賞)と直接交流の組合せ。製作工程の工夫と、材料・用具の特性に応じた表現力の育成
- ・[数学×作業学習]ポップアートカード:図形を学ぶ際に紙すき製品を提供。メッセージカードによるやりとりを行うなど、他者と関わろうとする意欲の育成

#### 【B地域】

- ・[カルチベーション(学校設定科目)]オンライン共同学習:グループワークによるSST等を通して、多様な価値観に触れ、相手に意見を伝えたり、相手の意見を受け入れたりする態度の育成
- ・[美術]インスタレーション:様々な創作の手法を学び、空間全体を意識しながら豊かに表現する能力の育成
- ・[音楽]合唱・器楽:協働的に表現する学習に取り組み、音楽活動の楽しさを体験することを通して、生活を豊かなものにしていく態度の育成
- ・[芸術]書道:見本の書を参考に、両校生徒が1文字ずつ分担して協働で合作の書を完成させることで、コミュニケーションや協調性の育成
- ・[総合的な探究の時間]地域貢献学習:地元イベントでスノーアートなどの共同制作を通して、社会に積極的に関わり参画しようとする態度の育成
- ・[日常的な交流]資格取得への取組:食品衛生責任者講習会へ参加し、資格取得を支援

### ②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方



#### 【A地域】

- ・両校合同の教員で構成するインクル実行委員会を組織し、企画推進、交流及び授業、体制構築の3グループを位置付け、具体的な意見交流を実施
- ・特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが、週1回連携校で勤務し、通常の学級や特別支援学級への助言、校内研修会の実施などに取り組み、日常的に専門的支援が可能となったことで、教員の専門性向上に寄与
- ・地域の中で、小・中学校、高等学校、特別支援学校の教員が他校種の授業を見学する互見授業に取り組む
- ・近隣の小・中学校、高等学校、特別支援学校が合同で研修会を実施し、教員養成大学教授や特別支援学校長などを講師とした講義や教員同士の協議などを通じて、地域全体の特別支援教育の専門性を底上げ

#### 【B地域】

- ・カリキュラム・マネージャーと両校の特別支援教育コーディネーターによる打合せで、教育資源の相互活用、交流及び共同学習、研修企画等を具体化
- ・月1回程度、事例を基に意見交換を行う「共に学ぶ会」を実施。高等学校の教員がファシリテーターを務めるなど、両校が主体的に運営する体制へ移行
- ・両校の初任段階教員によるチーム・ティーチングの継続的な実施

## 本事業の成果(事業2年次)

共同学習の側面を意識した交流及び共同学習を実施したことで、両校の生徒が自然な形で関わり合うなど意識の変容や、教科のねらいの達成に近づく姿が見られた。

A地域では、両校の教員が共に学習指導要領を確認し合いながら、音楽科や美術科などの授業を協働して計画するなど、教職員の意識の変化と一体感が醸成され、合同研修会では、参加者の約9割が事業への理解や関心が深まったと回答している。また、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが週1回中学校で外勤する体制が定着し、特別支援学級への助言や校内研修の実施などを通して、日常的に特別支援教育の専門性向上が図られる支援体制が構築された。

B地域では、更別農業高等学校の「カルチベーション」の授業を合同で実施したことにより、生徒が「自分とは異なる多様な意見」に触れ、相手の気持ちを考える大切さを学ぶ貴重な機会となった。また、食品衛生責任者講習会への参加や、規格外じゃがいもの提供による食育・SDGs学習、地域行事のボランティアなど、授業での交流に留まらず、実務的・地域貢献的な連携が実現し、両校の教育資源の相互活用が促進された。

「共に学ぶ会」と銘打った教員研修では、事例検討を通した両校教員のスキルアップを図っており、研修後のアンケートでは、「生徒が何に困っているのかを意識できるようになった。」「生徒を見る視点が変わり、異なる視点から言動を捉えることができた。」といった意見があげられるなど、障がいの社会モデルや特別支援教育への理解が深まりにつながったことがうかがわれた。

### 前年度からの 変化・改善点

特定の教員に依存するのではなく、学校全体、地域全体で支える持続可能な体制の構築を目指し、連携協議会に加え、両校合同の委員会を設置し、担当者間の打合せを円滑に行った。このことにより、学校間の垣根が低くなり、教員同士が互いの生徒の実態や教育課程について理解を深め、交流及び共同学習の活発化や、それを支える教員間の連携の促進につながった。

### 【課題】

- ・事業終了後を見据え、カリキュラム・マネージャーや特定の教員の熱意に依存することなく、現行の教員配置や指導体制の中で一体的な学校運営を維持できるよう、持続可能な体制を構築することが求められる。
- ・A地域では、現在、中学校第2学年の生徒を中心とした取組となっているため、今後は全学年へと対象を拡大するとともに、交流及び共同学習における学習評価の在り方や、その累積的な評価方法を確立していく。
- ・B地域では、教育課程上の位置付けを整理するとともに、特別支援学校の生徒が高等学校の授業に参加する場合や、その逆の場合における単位認定や学習評価に関する規定を整理していく。

### 【今後の展望】

- ・2年間の取組を通して培った基盤を生かし、次年度は近隣の学校との連携を強化し、地域全体で子どもを見守る小・中・高連携の具体化を図ることを目指す。
- ・モデル事業終了後も自走できるよう持続可能な体制を確立するとともに、町内の他校や近隣市町村においても参考とすることができる「等身大のモデル」として、インクルーシブな学校運営の取組を発信し、全道・全国へと広めていく。
- ・本事業の成果を基盤として、地域全体で共に学ぶ教育環境の整備を進め、すべての子どもが共に学び育つインクルーシブ教育システムの構築に資する取組として発展させていく。

### 課題

### 今後の展望